

# 本校進路指導の現状と今後の取り組み

進路指導部 大平典男 高柳真人  
(工業科) (農業科)

## 1. はじめに

本校は平成6年、全国に先駆けスタートした総合学科の設置校7校の一つとなった。平成10年度には全国で100校余の総合学科が高校改革の中心的な役割を担う事になっている。

本校ではこの3月に総合学科1期生を卒業させ、総合学科としての充実期に入ろうとしている。これまでの取り組みをどう評価し、これからの取り組みを学校全体でどのようにしていくかを考えて行かなければならない。

総合学科の教育方針は

- ①自ら学ぶ意欲、将来に対する目的、主体的な学習習慣を身につけさせるようにする。
- ②学習することの意義や学習目的を明確にさせ、学習活動に責任を持って取り組ませる。
- ③自己の可能性、自分なりの生き方を求め、自分の意志と責任で、自分の進路を主体的に選択決定させる。であり、これより本校進路指導の基本は、「自ら学ぶ」力を育てることである。そのため、いかに生徒を自覚させ、「自ら学ぶ」意識を持たせるか、すなわち、進路目標をただの夢に終わらせないよう生徒が目標に向かって努力し、それが実現できるような指導・支援がその中心となる。

進路指導もこれまでの50年の歴史を持つ職業学科時代の方式から、総合学科の特徴を生かした進路指導への変革が必要になり、改善に取り組んでいるところである。

## 2. 進路指導の動き

### ① 偏差値教育への偏向

これまでの進路指導は、とかく結果が目に見えた形ですぐ現れる受験や就職の結果を中心に考えられたり、取組まれてきた。生徒や保護者も、このことを非常に重要視した。特に進学においてはそれが強く現れた。

高校や大学への進学は、それまでの義務教育とは違いその学費が大きな経済的負担となる。特に、学校を選択肢が少ない地域では、より確実な合格が受験生や保護者の強い要望であった。受験での失敗は、より経済的負担のかかる学校を選択となったり、遠隔地の学校への進学

となり、進学を断念しなければならなくなることもつながった。特に、高校受験では、大学生とは違い年齢が低いこともあり、より確実な入試情報が必要になり、偏差値が強い意味を持つようになっていった。

それまで上級学校への進学は、限られた階層の子弟によるものであったが、我国の経済発展から教育の大衆化が始まり、保護者が子弟に対し財産として教育を受けさせようとする熱意の高まりによることも大きな要因としてあげられる。

そのため学校では、いかに失敗の無い受験を行わせるかが教員の力量として問われ、それに勢力をつぎ込むようになり、より確かな、全体的な情報を得るために業者テストとその偏差値が一人歩きするようになっていった。特に、中学校では、受験業者の片棒をかついだかのような手厳しい批判を浴びたが、このような社会的背景があったこともまた事実である。現在偏差値教育は、教育への投資ができる者とできない者との差の表れとして、次第に大きくなりつつあるとも言われている。

### ② 進路指導は生き方教育へ

近年進路指導は、「生き方の教育である」と声高に言われ、自分の人生選択をすることを学ぶ教育活動であり、「人間の生き方を指導することがその主眼である」となっている。

進路指導は知力や体力と同じように、「進路力」と呼ぶ、自らの進路を切り開く力を身に付けさせることがその目的であり、自己発達への実感と可能性への自信をしっかりとつかませることである。つまり、自分の進路を切り開く力や自分の進路を選び取る力をつけさせることが中心とならなければならない。

生徒指導が生徒の現在に関わる部分の指導が中心であるとする、進路指導は、生徒の将来に関わる部分を中心にいた指導であると位置づけることができる。生徒に「よりよい生き方とは何か」や、進路の選択や決定についての支援がその指導の中心となるよう推進されなければならない。

### ③ 進路力をどう育てるか

進路指導の直接的なねらいは、進路力と呼ばれる進路の選択力、計画力、適応力などの基礎的能力の育成であ

る。今日、大学生ですらその進路を決められない状況が出現していることからわかるように、自分の進路について設計したり、計画したりする能力の無い、自分の進路が決められない生徒が最近目だつようになっている。

いかにこの能力を高めていったら良いのであろうか。

第一に、「自己の将来への目的意識の形成」を進路指導の中心課題とし、自分が何に向いているのか、なるにはどうすれば良いのかなど身近なことから展開し、それにより将来への明確な目的意識を持たせるようにすることが必要であろう。

さらに、進路の選択・決定について考えたり、人間として望ましい生き方に関することを取り扱う必要がある。

そのためには職業観や人生観など進路観を構成する全体的な価値観を育成しなければならない。また、高校では選択した進路の実現のため、実際的な取り組みをして行かなければならず、その取り組みは簡単に行かないこ

とも事実である。特に、進路が大学短大、専門学校、就職と多岐にわたる本校のような学校では、その指導が極めて難しくなるのが普通である。

本校のような総合学科では、生徒に目的意識を持たせるために2者面談・3者面談がより重要となる。総合学科は、上級学年ではほとんど選択科目であり、クラス単位での授業時間の数が少なく、目的意識のさまざまに異なる生徒に取って、HR担任との面談がたいへん重要なこととなる。そこで本年からより充実した面談ができるよう、3年次生は午後の授業時間内に3者面談を、2年次生は2者面談を実施することにした。

また、総合学科では、クラス担任もこれまでの単年度ごとから、3年間持ち上がる方式に変更し、副担任も各HRごとに1名となった。これにより年次会と呼ばれる担任団が中心となり、それぞれの学年団が持ち味を出しながら主体的に指導をする方式となり、HRでの指導が充実するようになった。

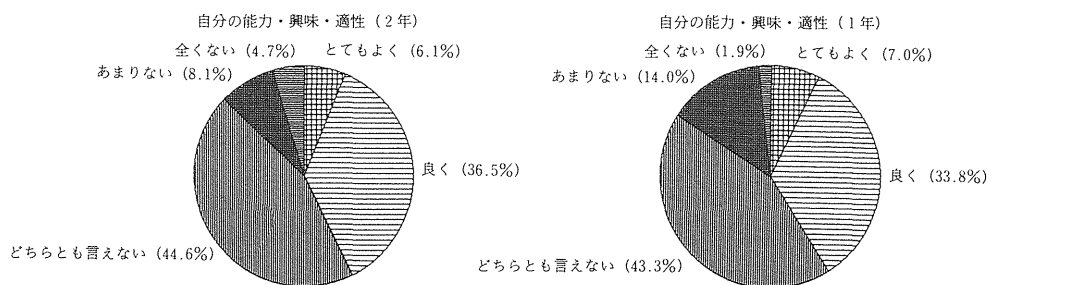


図1 「あなたは自分の能力・興味・適性について知っていますか。」意識調査結果

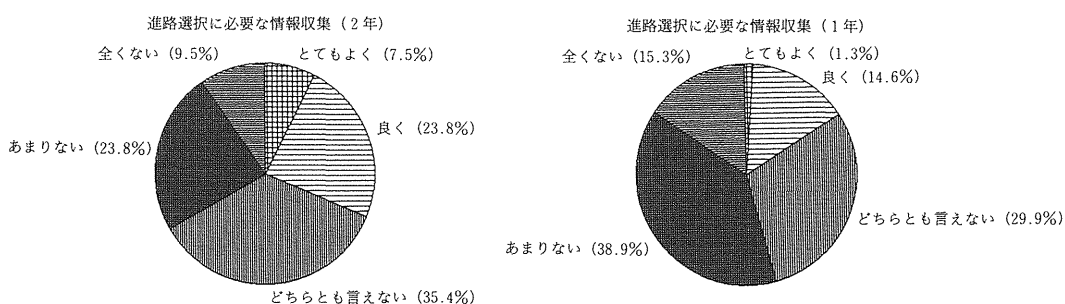


図2 「進路選択に必要な就職・進学に関する情報収集をしていますか。」意識調査結果

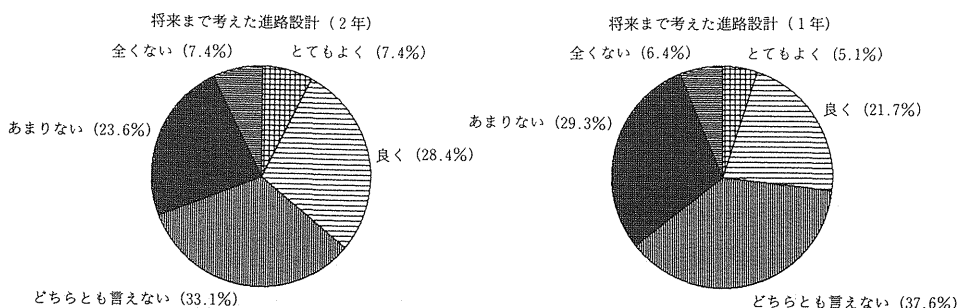


図3 「卒業後の将来まで考えた進路設計を立てていますか」意識調査結果

### 3. 本校生徒の現状

#### ① 進路意識調査で見る本校生徒

平成8年11月に1、2年次生に実施した進路意識調査での本校生徒の状況でみると、図1のように、自分の能力、興味、適性を知っているかの間には、2年次生がやや良く理解していると答えている。新科目「産業社会と人間」を通した進路に関する指導や、LHRでの適性検査等もなされているが全体的にまだまだ進路意識の発達是不十分であるように思える。

進路選択に必要な情報収集については、図2のように、さすがに2年次生の方がよく情報を収集していることがわかる。しかし、それでも全体の3割ほどである。逆に、これは2年次生の11月の段階でのアンケート結果であり、約3割がほとんど情報収集をしていないとの結果を見ると、自分の進路の決定のための努力が十分になされていないと見るべきであり、いかにしてこの数を減らしていくかが今後の課題である。

将来を考えた進路設計を立てているかどうかの間の結果は、図3のようである。1年次生も既に前期の週4時間の「産業社会と人間」で、進路に関する授業を終了しているがまだまだ先のことと見ているようである。2年次生ではさすがに将来の進路計画を考えている方がいない方より5%ではあるが上回っていることは、進歩であると感じて良いだろうか。

#### ② 学校生活アンケートにみる本校生徒

図4の調査は、平日の学校のあるときの1日の学習時間のアンケート結果である。1年次生で55%、2年次生では67%の生徒が全く家庭学習をしていないというびっくりする結果となっている。中だるみの2年と良く言われるが、進学を希望する生徒も多数含まれていることを考えると、家庭学習の定着指導がこれからの学校全体での大きな課題である。

図5の調査は、現在の学校での学習の自己評価である。ちょうど良いが両学年とも約半数となっている。学習時間と合わせて見ると、ほとんど日常の学習がなくても済

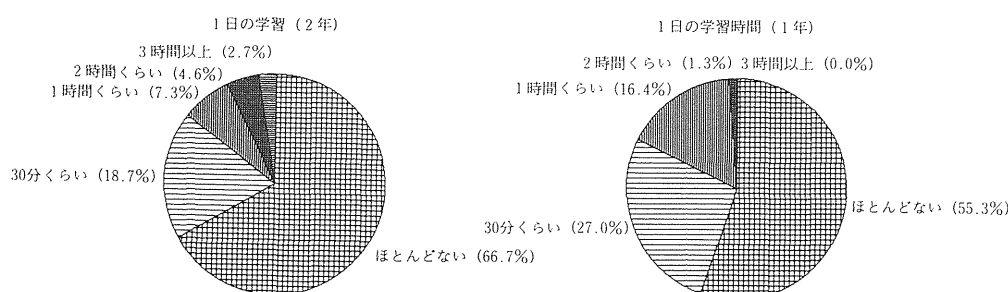


図4 「あなたは1日の学習時間は平均してどのくらいですか」アンケート結果

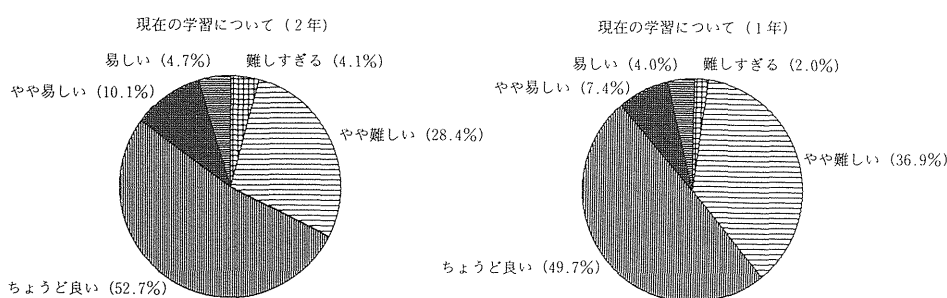


図5 「現在の学習についてどう思いますか」アンケート結果

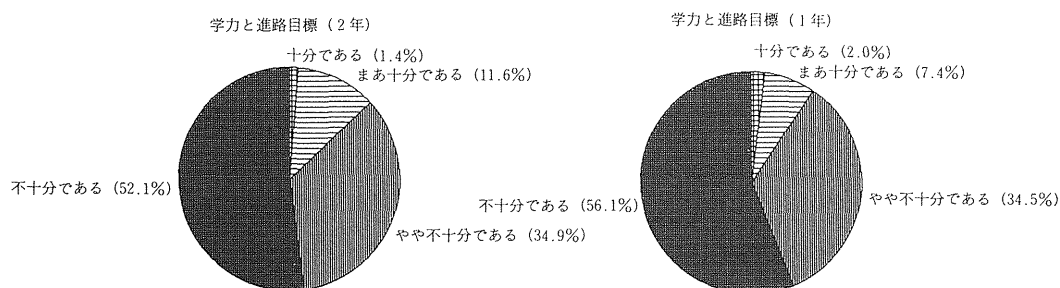


図6 「自分の学力が自分の進路目標達成に十分であると思いますか」アンケート結果

んでいるという結果であり、学校全体での学習指導の改善が必要である。

図6の調査は、自分が考えている進路に対し現在の学力をどのように感じているかの問である。これには半数以上の生徒が不十分であると答えている。

以上のことから、自分が希望する進路をめざすには、今の状況は改善しなければならないと感じてはいるが、何とか学校の学習にはついていけそうなので勉強はあまりしていないという実態が読み取れる。自分の夢を実現させるためにも「自ら学ぶ」態度の育成指導が必要であり、学習時間を増やす取り組みが必要である。

### ③ 生徒の進路希望状況の推移

表1は、総合学科1期生の3年間の進路希望状況の推移である。入学時の希望は、そのほとんどが保護者の意向が強く出ているものと思われるが、半数近くが大学・短大を希望している。本校は専門教育を柱にした総合学科であり、進学には向かない学校であることを進路説明会等で中学生や保護者にはっきり表明している。しかし、このような結果であり、やはり根強い進学志向があることを物語っている。

2年次になると就職希望が多くなり、前述のアンケート結果からもわかるように、継続的な学習がなされていないことにもよるのだろうが、非常に現実的になってきていることがわかる。

3年次になると、4月の調査では再び大学短大の希望が多くなり、本人か保護者のどちらの意向なのであろうか進学意識が強くなってくることが見える。

卒業時の進路決定状況では、大学進学から専門学校へと進路変更していることがわかる。これまでの職業学科時代と異なる特徴的なことは、多くの浪人生が生まれていることと、多くの高校で問題になっているように、進路を決めない（決められない）生徒の出現である。

今後、追跡調査等により卒業後の状況を調べ、総合学科の検証をしていくつもりである。

進路別	入学時	2年次	3年次	卒業時	備考
大学・短大	60	47	56	27	
専修学校	32	32	47	56	
就職	16	48	54	43	
自営・家業	6	1	1	1	
未定・その他	45	27	0	31	浪人16

表1 総合学科1期生の進路希望状況の推移

## 4. 進路指導の問題点

これまでわが国は、外国からの優れた学問の成果を吸収し、模倣し、発展させることに力点が置かれた。これからは自ら創造し、課題を解決していく能力を養うことに力を入れなければならないと言われている。しかし、現実はまだなかなか進展がみられていない。それはわが国の教育システムによることが大きいとよく言われている。中高生の最大の関心時は知識量の多寡を競う入試であり、高校・大学への入学のための試験の負担が非常に大きいことである。それにより有名校への入学が一番に評価される社会となり、狭い序列的な評価により人間が見られる社会である。その弊害も多く出ている。大学での、指示された課題は良く取り組むが、自発的に課題を見つけ解決していく学生が少ないという指摘に現れている。入試の多様化や評価の多元化など小手先の改善はなされているものの、本質的な改善方法にはほど遠く、受験競争は何等緩和されていないのが現状である。

### ① いかに自ら学ぶ力を高めるか

これまで本校における進学指導は職業高校ということもあり、普通科や専門学科の何人かの教員によるボランティアの進学指導はあったが、本格的な組織だったの進学を目指した学力指導、進学指導はなされてこなかった。図4（P3）の生徒アンケートの一日の学習状況からもわかるように、生徒の日頃の学習時間は決して多くなく、家庭学習がしっかりと行われていないのが実状と言っている。アンケートの中にもその理由として「勉強はあまり得意でないから」と書いている生徒もいる。しかし、上級学校への進学はしたいという希望も多くあり、いかにして継続して学習する意識を高めていくかが大きな課題である。

### ② 社会変化への柔軟な対応

社会の状況を見ると、企業ではこれまでの雇用慣習が崩れ始めている。企業が求める人材は、専門性を持った人材で、何ができるかが問われる時代となりつつあり、これまでの平等主義から、力あるものが富を得る時代になろうとしている。また、大学等においても大改革に取り組みつつあり、少子化による生徒の減少に対する大学自体の生き残りをかけた改革となっている。すでに一部の短大では、生徒が集まらず定員割れを起こしている学校も出てきている。

進路指導においても、このような社会の変化への関心を持ち、積極的に情報を集め、対応して行かなければならない時代となっている。

### ③ 地道に継続する指導

進路指導や生徒指導は、なかなか教科指導のように位置づけることができない難しい一面を持っている。これらの指導は、結果が目に見える形としてすぐに現れないことから指導が長続きしないことが多かったり、担当者の交代等により継続が途切れてしまうことも多い。地道に継続した指導をいかに続け、評価が得られるような学

校の指導体制を作られなければならない。

日本の教育改革は、流行作りであるとの教育評論家の言葉もあるが、改革は、一朝一夕になるものではない。財政措置などの教育基盤整備をするのはもちろん、学校、保護者、そして社会全体の意識改革を進め、できるところから取り組んで行かなければ後の無い状況になってきている。

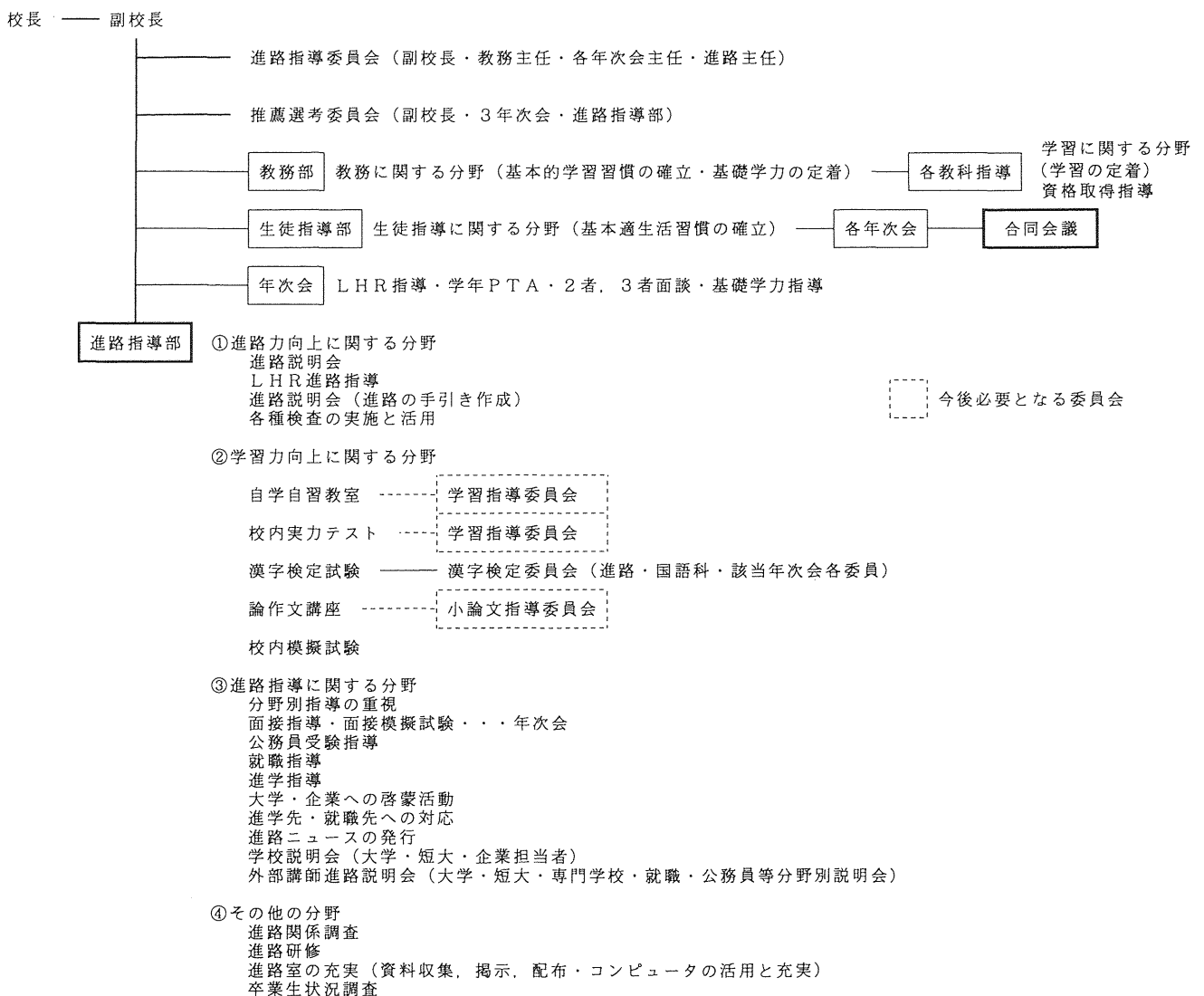


図7 進路指導活動図

## 5. 進路指導の今後の取り組み

生徒が将来何をめざすのか、そのために今何をしなければならないのかを考え、生徒が「自ら学ぶ」姿勢を持ち続け、目標に向かって継続的に努力するような指導がなされなければならない。そのための指導体制をいかに整えていくのかを考えなければならない。

本校のような小規模校では、いかに少ない労力で効率的、継続的な指導が続けられるかである。生徒の意識の変化を認識し、これまでの職業学科時代の手法を反省し、総合学科の進路指導を作り上げて行かなければならない。総合学科に入学した生徒に、3年間に「何を与えられるのか」を真剣に考えなければ、ただもの珍しい学校で終わってしまうような気がする。やる気の無い生徒をめんどう見て、卒業させることも大事であるが、入ってきた本当にやる気のある生徒を失望させない教育もまた必要である。

そこで進路指導の活性化のため、進路指導の構造化による問題点の把握や発見を試みることにした。図7は、本校進路指導の活動図であり、この中から問題を意識化し、マイナス面、プラス面を検証し、改善を検討していくことにした。

### ① 進路指導委員会の設置

総合学科になり、担任制度は基本的には3年間持ち上がりで担任団を形成する事になった。学年主任を中心とした年次会が、各年次会の持ち味を出しながら具体的な進路指導を押し進めていくことは悪い事ではない。

しかし、年次会は、本校のような専門教育を持った小規模校では普通教科、専門教科の教官が構成する組織であり、年毎に教科担当者の構成や年齢のバランスを同じ構成にする事は校務分掌作成上不可能である。

年次会の特徴を出すと言っても、生徒にとってある程度の公平性、平等性が学校全体として必要であり、そこに冷静で客観的な判断による統一性が必要となる。総合学科での進路指導は、進路指導部が、各年次会と協議しつつ行われるが、全校的な課題にはその枠を超えた検討協議が必要となる。そのため進路指導委員会が本年より編成され、校内推薦の問題や全校的な漢字検定試験の実施等について討議がなされ、実施されることになった。

### ② 自学自習教室の開設

いかに理想や夢を持っていたとしてもそれが実現しなければ何にもならず、ただの夢で終わってしまう。高校生の進路指導には現実的な進学や就職の問題が卒業時に待ちかまえ、それを解決して行かなければならないこと

もまた現実である。理想だけで済ませられない現実があり、挑戦していかなければならない目の前のハードルがある。それが大きく将来にかかわり、その一番の重要ポイントが学力の向上である。進学ではもちろん、就職においても大きな関門となるのが高校生に必要な学力である。日頃の学習がその基本となることは当然であるが、少しでも自ら学ぶ姿勢を育てるために、昨年度より夏季休業中の前半の2週間、英語、数学、国語担当の全教員にお願いし、1教科1時間半の時間配当で1日2教科の時間割を作り、生徒は自分で学習するテーマを決め、担当教員は個々の生徒の質問に答える形式で学習する機会を提供することとした。自学自習教室と名付けられたこの試みは、初年度40名近くの3年生が参加して実施された。教員側の評価はまちまちであるが、さらに生徒に自ら学ぶ力が定着するよう改善発展していかなければならない。

### ③ ロングホームルーム（LHR）での進路指導

進路指導をクラス全体や学年全体で取り組もうとするとき、LHRの時間が使われることになる。しかし、この時間は学校行事や学年行事などの計画討議や各種試験、調査などいろいろな面で自由がないのが現状である。

また、高校の進路指導は出口指導に偏っていると批判を受けるが、一部の進学校を除き、多くの高等学校では生徒の進路希望が多様であったり、生徒の進路意識にも大きな差位があるのが現状である。そのためLHRでの進路指導は、その重要性は知りつつも、生徒が乗ってこない雰囲気の中での指導となったり、また、教師の中に、本来進路は生徒がそれぞれ自分で考え、決めていくものだと言う意識も残っており、なかなか教師に取って取り組みにくいものの一つである。

本校でも気軽に誰でもできるLHR進路指導を目指し、具体的な進路指導の指導案を、学年で協力して作り上げることにより、また、それを蓄積改良することにより、取り組み易いLHRでの進路指導が可能になるようする必要を感じ、取り組み始めたところである。図8にその指導案の例を示した。この試みが定着し、LHRでの全校的な指導体制を作り上げられればと思っている。

## 6. おわりに

少子化による生徒の減少期は続き、今後も生徒数は減少し、何年後かには大学の入学定員と進学希望者の数が同じになり、入試競争がなくなるとの報道もなされている。今の高校生が社会の中核となる21世紀には、わが国はどのようになっているであろうか。また、社会の情報

LHR進路学習指導案		
1 指導テーマ	自己理解を深め、進路目標を確立する	
2 指導目標	自分史の作成を通し、自己形成の過程を探る 自分の適性を知る	
3 指導展開		
導	活動内容	指導上の留意点
入	本時のねらいと展開方法を説明する。	春休み中に準備しておいた親子作成データを配布する。
展  開	各時代に自分は何にあこがれていたのか 思い出してみる。  自分がいかに育ってきたかを確認する。  現在の自分がどのように考えながら生きているのか見つけてみる。  過去の自分から現在の自分を見つめ直し、 進路目標を考える。	データを参考にして、各時代を振り返らせる。  DSCP適性検査の資料も参考にさせる。
ま と め	本時を振り返り、思ったこと、気づいたこと等感想を書く。	自己理解を深め、将来の自分を考えられたか確認する。

図8 LHR指導計画案(例)

化や国際化がますます進み、企業の雇用システムは実力主義の中でどのように変わっているであろうか。その状況で、高校生を取り巻く競争の世界がなくなっているとは思われない。もっと厳しい淘汰の論理がまかり通っているのではないかと危惧される。

各学校が生徒に何を与えられる学校であるかが問われ、本当に力がつく学校選びがなされているであろう。われわれは教育活動のあらゆる場で何を与える教育をしているのか自問自答を繰り返し、教育の特色を持たせて行か

なければならない。進路指導もまたあらゆる場面で、生徒の自己の発見や、自ら学ぶ態度の育成や、将来を見据えた進路設計ができるような進路力を高める指導に挑戦して行かなければならないと思っている。